

長期留学・海外インターンシップチャレンジ奨学金

報告書 2025 年 06 月 10 日
国際経営学部国際経営学科 3 年
Ryogo Endo 遠藤亮吾

長期留学・海外 インターンシップチャレンジ奨学金をいただくことができ、大変光栄に思っております。私は2024年9月から2025年6月までの9か月間アリゾナ大学(The University of Arizona)に長期留学をしました。交換留学プログラムを準備してくださった方々、留学中に支えてくださった方々のおかげで無事留学を終えることができました。

I would like to express my gratitude to everyone who supported and guided me throughout my study abroad experience. The kindness, encouragement, and invaluable advice from the people I met have had a profound impact on my journey. The lessons I've learned and the perspectives I've gained have not only broadened my horizons but also strengthened my confidence and resilience. Thank you all for your generosity and guidance. I will carry these lessons with me as I move forward.

はじめに

幼少期にフィリピンに住んでいた経験があり、日本とは異なる文化や価値観に触れる中で、異文化への強い興味が芽生えました。以降、大学進学後もその関心は続き、実際に多様な文化の中で生活し、学びたいという思いを持ち続けてきました。

アメリカへの留学を決断した理由は主に二つあります。一つ目は、アメリカ経済への関心です。アメリカは世界経済において重要な役割を担っており、その仕組みや動向を現地で学ぶことで、自分の知見を深めたいと考えました。国際経営学部のGeorge Wang先生のCorporate Financeという授業で金融論について学び経済規模が最大のアメリカ経済は日本ないしは世界の金融市場に大きく影響を及ぼしており特にアメリカ合衆国の中央銀行システムであるFRBの金融政策はアメリカ経済の発展の為に政策金利を決定し通貨供給量を調整することでアメリカ経済成長率の最適化を図っており、アメリカでの金融政策がどのように人々の生活に影響しているのか、また、資本主義によって経済は発展する一方で、貧富の格差が拡大している現実があり、アメリカで暮らす人々がその中でどのように生活しているのかを自分の目で確かめたいと強く思いました。

二つ目は、交換留学生とのディスカッションクラスを通して必要だと感じた「英語を用いて相手の考えを深く理解し、自分の意見を的確に伝える力」、そして「文化の背景に根ざした価値観を理解する力」の重要性です。私が所属する国際経営学部では、約8割の授業が英語で行われており、多様な国籍や文化を持つ学生が共に学ぶ環境が整っています。中でも印象的だったのが、交換留学生とのグループディスカッションでした。語学力に加えて、文化的な前提や価値観を理解していないと、表面的なやり取りにとどまり、本質的な議論に踏み込めないという課題を感じました。たとえば、ビジネスにおける「リスクの取り方」や「個人と組織の関係」に対する考え方が文化によって大きく異なる中で、そうした前提を理解しないまま発言をしても、相手に十分に伝わらないという場面がありました。そうした経験を通じて、語学力の向上だけでなく、その言語が生まれた文化や背景を深く理解することの重要性を実感しました。アメリカへの留学は、まさにそうした文化的多様性の中で生活し、学び、

議論することで、自分の価値観を広げ、国際的な場で通用する表現力や思考力を磨く絶好の機会であると考えました。

アリゾナ大学について

アリゾナ大学は、メキシコ国境から車で約1時間の距離にあるツーソンに広大なキャンパスを構えています。メインキャンパスには179棟の建物があり、敷地面積は約1.5平方キロメートルにもおよぶほど広大で、キャンパス内には多種多様な種類のサボテンが点在し、まさにアリゾナらしい風景が広がっています。ツーソンは天体観測の名所としても知られ、夜空には無数の星がくっきりと見えますが、その反面、街灯がほとんどないため夜道は非常に暗く、街中に生い茂るサボテンにぶつからないよう注意が必要です。

大学周辺にはレストランやカフェ、バー、学生用アパートなどが立ち並び、典型的なアメリカの学生街の雰囲気が漂っています。また、地理的な近さからメキシコ出身の学生も多く在籍しており、キャンパス内ではアメリカ国内外の学生が日常的に交流しています。こうした環境は、多様な文化や価値観に触れる貴重な機会を提供してくれます。

さらに、ツーソンは大学街としてだけでなく、エレクトロニクス産業の中心地としても知られています。アリゾナ大学はアリゾナ州立大学とともに、全米有数の強豪校が集うPAC-12カンファレンスに所属しており、アメリカンフットボールやバスケットボールの試合は毎年全米で放送されるほどの人気を誇ります。56,000人以上を収容するスタジアムは、地元の学生や市民にとっても一大イベントの舞台となっています。



キャンパス夜



キャンパスの中心にそびえ立つWild Cat 像

授業

授業では先生と生徒が議論を重ねながら進行し、経験を重ねる中で、苦手意識が徐々に薄れ、心理的なハードルが確実に下がっていくのを実感しました。特に留学において重要だと感じたのは、周囲の目を気にし過ぎないことです。英語力への不安や他者の視線を過度に意識して行動を控えるのではなく、自分が何を成し遂げたいのかに焦点を当てるのが、本当に充実した日々を送るためには欠かせません。自らの意思に基づいて積極的に行動することで、かけがえのない経験を積み重ねることができたと確信しています。

アリゾナ大学では、日本と異なり秋学期が8月～12月、春学期が1月～5月という学年制度が採用されています。履修科目は一定の制限はあるものの、学部を越えて多様な分野から選択でき、自分の関心に合わせた学びが可能です。授業は10人以下の少人数制から100人規模の講義まで幅広く、成績評価は中間・期末試験、レポート、プレゼンテーションなどを通じて行われます。授業レベルも段階的に構成されており、100・200番台は基礎的な導入科目、300番台以上は専攻分野の専門性を深める内容となっています。このような柔軟で多層的な教育環境が、主体的な学びを後押ししてくれました。

具体的には金融論のクラスで生徒は事前に指定されたテキストと教授が引用したニュースなどを読み自分で気になった部分を調べて授業に挑みます。授業は質疑応答形式で行われ生徒がほかの生徒に学んだことを説明したり教授の一方的な講義でなく生徒がアウトプットしつつ教授が不足していた知識を補填するなど生徒の理解に基づいて授業が進行していました。また、積極的に意見を述べたりディスカッションに参加することが評価対象となっており自分の意見を瞬時にまとめて発言し、他者の意見を聞いて吟味しながら反論や同意を練るスキルが試されました。アメリカでは意見と感情が切り離されており、率直な反論が飛び交う中で感情的にならず、建設的な意見交換を行う姿勢が求められます。留学中は英語がネイティブ並みのスピードで話せず相手を待たせることも多々ありましたが自分の意見を発信したいという強い気持ちを持って遠慮などせず主体的に発信する姿勢が大切だと感じました。

他には 起業家精神論のクラスでは講義が中心でしたが生徒同士でグループを作りincremental product (漸進的製品)について考えグループで意見を出し合ったアイデアを基にプレゼンテーションをすることもあり、グループ同士でコミュニケーションをとり役割を分担して行いました。私たちのチームは飲んだ水の量を測定しパーソナライズされた水筒をビジネスアイデアとして採用し、客のターゲット層を絞るためのアンケートを作り、価格設定や特許の取得について学びました。このような授業ができるのも教授の授業構成の自由度が高く非常にクリエイティブで実践的だと思いました。

なかなか日本では経験できないような授業が多々あり、交換留学生は履修できる授業が制限され不利だったが、その反面様々な学問領域に触れられる貴重な機会を得られたと感じています。またこのような授業で培った国際的な感性と主体性を活かし、グローバルな舞台で主体的に挑戦し、貢献していきたいと考えています。

食事

私は基本的に大学内の食堂で食事をとっていました。ただし、「食堂」といっても、アリゾナ大学には独自のレストランがあるわけではなく、主にパンダエクスプレスなどのファストフードチェーンが5店舗ほど並んでいます。そのほかに、ビュッフェ形式のレストランがキャンパス内に2か所あり、私は主にその2店舗を利用していました。

また、アリゾナ大学には「ミールプラン」という制度があり、学期の初めに一定の料金を支払うことで、プランに応じた回数分の食事券が学生証にチャージされ、学内の飲食店で利用できるようになります。前期はこのプランには加入していませんでしたが、ミールプランを利用することで校内の消費税が免除されると知り、後期から加入することにしました。

大学周辺には多彩なレストランが点在しており、学業の合間に様々な国の料理を楽しむことで、日常の中でも異文化理解が深まりました。特にお気に入りだったのはメキシコ料理で、中でもmenudo(モツ入りスープ)はクセになる辛さと独特の風味が魅力で、試験前の夜食にもぴったりでした。アリゾナには、カリフォルニア発祥の人気ハンバーガーチェーン「In-N-Out」も進出しており、大学近くにも店舗があります。私は週に数回ジムで筋トレをしていたのですが、「筋肉にはたんぱく質が必要だ」と友人と言い訳しながら、トレーニング後によく友人とIn-N-Outに直行していました。



In-N-Out, シークレットメニュー



Menudo

| スポーツ



サッカー部集合写真

アリゾナ大学は、充実した運動施設でも高い評価を得ており、キャンパス内には「Rec Center」と呼ばれる大型ジムがあります。この施設は朝6時から夜12時まで利用可能で、プールや卓球、テニス、バレーボールなど、あらゆるスポーツを楽しむことができます。友人と合同でトレーニングをしたり、気軽にさまざまなスポーツに取り組める環境が整っており、私自身もほぼ毎日、最低1回はこのジムを訪れていました。

私は大学内のサッカー部にも所属しており、40名ほどの部員とともに、週2回の練習と週末の試合に励んでいました。練習は主に火曜と木曜の午後7時から約2時間にわたって行われ、日が沈む頃には人工照明のもとで本格的なトレーニングが始まります。練習では基礎的なフィジカルやボールコントロールに加え、戦術的な動きやチームプレーの連携も重視され、非常に実践的な内容でした。

週末には他大学との試合が組まれており、ホームだけでなくアウェイでの試合も頻繁に行われました。遠征が必要な場合には大学側がバスを手配してくれるため、安心して遠方の試合にも参加することができました。異なる地域で異なるスタイルのプレーと向き合うことで、競技力の向上はもちろんのこと、多様なチームとの交流を通じて、スポーツを媒介とした国際的なつながりの広がりも感じることができました。また大学のサッカー部に所属とは別に、アリゾナ大学には一般的な部活動に加えて、「インタミューラル・スポーツ (Intramural Sports)」という制度もあります。これは学生同士が自由にチームを組み、他のチームと対戦する形式のレクリエーション型スポーツリーグです。この制度を活用し、私はバレーボールやバスケットボールはもちろん、アメリカで人気のあるピクルボールやスパイクボールなど、多種多様なスポーツに挑戦しました。

友人関係

アリゾナ大学での留学生活において、私の友情の多くは、Student Associationという学生主体の文化系クラブ、履修した授業、住んでいた寮、そしてIntramuralと呼ばれる学内スポーツイベントなど、さまざまな場面から自然と生まれました。初めの頃は、文化や言語の違いに戸惑い、どちらかといえば受け身の姿勢で、友人たちの言動から多くを学び、吸収することに注力していました。しかし、英語に少しずつ慣れてくるにつれ、自分から積極的に話しかけたり、日本の文化について紹介したりする機会が増えました。特に印象的だったのは、外国人の友人たちから日本文化に関する質問を多く受けたことです。アニメや漫画、J-POPといった日本のポップカルチャーが世界中に広がっていることを実感し、同時に、そうした関心をきっかけに深い交流が生まれることも少なくありませんでした。ポップカルチャーを入口に、宗教観や社会制度、教育など、より本質的な話題へと会話が広がっていくこともあり、日本人としての自分の立ち位置を見直すきっかけにもなりました。こうした経験の中で、自分の言葉に耳を傾け、文化や背景に興味を持ってくれる人たちが増えたことで、自然と友情の輪が広がっていききました。

そして何より、友人たちとの何気ない日常会話や議論を通して、英語力の上達を実感する機会も多くなりました。とはいえ、言語というものは単なる単語や文法だけでなく、「言葉の裏にある感情や意図」が非常に重要であることを、何度も痛感させられました。特に苦労したのは、自分の発言が相手にどう受け取られるかという「ニュアンスの調整」です。たとえば、日本語では冗談として通じる表現も、英語ではストレートすぎたり、逆に遠回しすぎたりしてしまうことがあり、気まずい空気を生んでしまったこともありました。それでも、率直に自分の考えを伝え、相手の反応を見ながら少しずつ言い回しを調整することで、徐々に適切な表現ができるようになっていきました。また、文化的背景や人種によって、同じ言葉でも受け止め方が異なるという事実に触れたことは、言語学習を超えて、異文化理解そのものの難しさと奥深さを教えてくれました。

このように、言語を通じて築いた友情は、単なる交流にとどまらず、互いの違いを理解し、尊重し合うことの大切さを教えてくれる貴重な経験となりました。今後も、こうした経験を糧に、さらなる語学力の向上だけでなく、多様な価値観に対する理解力と表現力を高めていきたいと考えています。



友人がメイクをしてくれた死者の日



メキシコ料理店で一枚

最後に

海外に身を置くことで、その国の文化に深く浸ることができ、同時に物事を俯瞰的に見る視点が養われます。日常の中で新たな気づきや発見があるたびに、自分自身の価値観を見つめ直す機会にもなりました。特に長期の留学は、単なる旅行とは異なり、決して楽しいことばかりではありません。だからこそ、多角的かつ客観的に物事を捉える力が身につくと実感しています。

これから留学を考えている方へのアドバイスとしてお伝えしたいのは、「思い通りにいかないことが多い」という前提を受け入れることの大切さです。だからこそ、どんな出来事もポジティブに受け止め、自分の糧にしていく姿勢が求められます。学生としての留学は、人生の中でも特別な一度きりの体験です。その国の文化にどっぷりと浸ることができる生活は、他では得難い貴重な経験です。このかけがえのない機会に感謝し、多くの出会いを大切にしながら、「ベスト」な選択にこだわりすぎず、自分にとって「ベター」な選択を意識していくことが大切だと思います。

Studying abroad in UofA was one of the greatest decisions I've ever made. It turned out to be very different from what I was expecting to experience if I think back before making a decision to come here. I had the privilege of studying at a university that embraces students from across the globe, fostering an environment where diverse perspectives are not only welcomed but celebrated. This enabled me to build lasting friendships and learn from distinguished professors whose insights challenged and broadened my worldview. Being far away from home definitely was challenging at times, but I found comfort in being uncomfortable by receiving so much help from others. Stepping out of my comfort zone definitely helped me develop a great deal of adaptability and patience, which has shaped me into a more well-rounded person. More than just gaining academic knowledge, studying abroad offered me an invaluable opportunity to redefine my identity through self-reflection and intercultural engagement.

Beyond personal growth, I've come to see how crucial studying abroad is to the development of one's beliefs, values, and aspirations. Immersing yourself in different cultures has been crucial in forming your worldview. Although it's not always simple to experience something you've never done before, doing so might open your mind to entirely new possibilities. The friendships I formed, many of whom were remarkably open-minded and easygoing, enriched my journey and left me with memories I will carry for a lifetime.

Finally, one of the most meaningful lessons I took away from this experience is the value of time. Time is the one constant that is equally distributed among us all yet how we choose to spend it defines our individuality. Every decision we make carries an opportunity cost, as pursuing one path necessitates letting go of another. While it's natural to reflect on past decisions, dwelling on regret over choices you can no longer change serves little value. What truly matters is how you move forward. Refining your decisions and making the most of the path you've chosen. This mindset guided me throughout my time in the U.S. Though it lasted only a year, I was determined to seize every moment and approach each opportunity with gratitude and purpose. Studying abroad has benefited my career and personal development, and it's an experience I can't recommend enough.

